

妙安寺だより 369

花見といえばサクラ

「花見といえば桜」なぜなのか。「花見」というのに花を見ている人は少なく、飲んだり食べたり宴会が主である。古代の宮中文化では「花」の代名詞は、中国の影響で梅の花だった。ある時期に桜になったと言われています。

唐などをまねて梅の花をでるをしていたが、屋外が心地よくなるのは桜の開花以降で、和歌としてもみやすいからだ。

市民の娯楽としての花見に貢献したのが8代将軍の徳川吉宗である。御殿山・飛鳥山など江戸市中に大量の桜を植樹し、「春先には集団で出かけて、一緒に飲み食いする。みんなが平等な日本独特の社交」として、現代の花見スタイルが確立したのである。

当時の桜の主流は「山桜」で、白い花と葉が一緒なのが特徴で、花ばかりの「ソメイヨシノ」とはがなっていた。江戸末期に生まれた「ソメイヨシノ」は明治になると急速に増えていった。

「朝日にえ、葉も含めたしっとりとな美しさを素直にたたえる。きらきら明るい中国文化などと対照的な日本人好みのさびだ」といわれている。

一方で、農村部においては「花見と言えば、むしろつつじだった」と言う。

「花より」の「花」はつつじであることが多いといわれている。

桜の季節よりも1カ月ほど遅い旧暦の「8日」ごろに、山中にをえ、つつじを見て楽しんでいたといわれています。ただ、桜は農耕期を知らせる大切な花でもあった。

※梅と桜の違い

- ①梅の花びらは上を向いているが、桜の花びらを下を向いているので豪華に見える。
- ②梅の花を見るのには肌寒いですが、桜の場合はちょうど良い気候になっている。
- ③梅の枝は再生するが、桜の枝は再生しない（桜は枝を折らないようにと注意書きをしている）
- ④梅は実がなり、梅酒や梅干を造ることができるが、桜は実がならない（さくらんぼとは別種である）